

優秀賞

## 落札スラプスティック

大川美絵子

(空港施設管理(株)保全課・大阪府)

「この物語はフィクションであり、実在の人物、団体、事がらには関係ありません。」

「落札しましたーッ」と、某CMの様な声で、総務兼、経理兼、労務兼、とりあえず、何でも兼務の戸畑明 45 歳独身係長は、電話も入れずに帰社してくるなり叫んだ。

息が切れているのは、節電で二基あるうちの一基が止められている、間借りしている雑居ビルのエレベーターを待たずに「テキサス・ビルメンテナンス株式会社」の事務所のある6階まで駆け上がって来たからに違いない。「社長すごいです。落札です。」と戸畑係長 45 歳独身は、もう一度叫んだ。

社長の児玉靖は

「そうか！やったか、ようし、いいぞ!!」

と喜びの声を上げた。

「でも社長、人はどうするんです、今のウチの人数じゃ、どうやったって無理ですよ。」と、何でも兼務のこちらは課長、大淀民生は、例によって心配症の一面を早速のぞかせた。

「まあまあまあ、大淀君もあわてないで。人が足りないのは、わかっていた事だし、すぐにエエデーに手配して、募集をかければよろしい。」

と、いつも恵比須顔の副社長外堀邦介が、とりなす。

「では、エエデーに連絡して募集広告載せてもらいましょう。」

と、変わり身も早い大淀課長が合わせる。

「戸畑君、エエデーの営業担当は誰だったかね？」

「はい、阪元さんです。すぐに連絡します。」

「人数は 30 人、いや 40 人だ。」と児玉社長

「社長 40 人は多過ぎです！」とまた大淀課長の心配症が顔を出したが副社長の「間をとって、35 人でどうでしょう社長。」の一言に一同うなずき、募集は 35 名、テキサス・ビルメンテナンス株式会社創業以来の大々的募集をかける事となった。

求人ミニコミ「エエデー」に載ったのが日曜日。月曜日からの問い合わせの電話は、降る様に、とはいかなかったが、それでも毎日 10 日間程は、切れ目なく入った。

早朝のパートタイムで 2 時間でも、4 時間でも良いと設定したのが良かったらしく、10 時からのパートの前に 2 時間とか、学生が授業の前に 2 時間、午後からのパートでは、生活が苦しいから午前中で 4 時間働きたい。等、それぞれの訳もあり、何より職場となるのが、市の中心部にある、最寄りの地下鉄駅出口から歩いて 5 分の位置にある中堅商社、速友物産の 10 階建てのビルである事が大きい。

テキサス・メンテにとって、このビルは、今まで請け負ってきた中で最大になる。

見積りでは、各階ベテランを、1 人から 2 人配して、新人パートを 3・4 人それに付け何とかまわせると踏んだ仕事だ。

児玉社長がこの仕事の事を聞き込んだ時は、社内の誰も、いつも温和な副社長、外堀の笑顔も一瞬、ピキッとひびが入った程、出来るとは思えなかった。

社長営業当たり前の中小企業、テキサス・メンテにとって、中堅とはいえ一部上場の大企業、速友物産に食い込めるとは、めったにないチャンスだという社長児玉の強

気のリードに、最初は大抵の事は丸く納めてしまう外堀恵比須顔副社長も、戸惑っていたが、三代目にして、創業者の生まれかわりと言われる程の、やる気、強気、根気の、児玉社長に、皆もしだいにその気になってきた。

何より、入札しても、落札はとて出来ないうらうというのは、児玉社長以外の大方の見方だったので、応札くらいはいいか、見積り諸々の経費も日頃頑張ってくれている社長の為、何とか捻り出そうと、心配症の大淀課長が決めた事で、全社あげて取り組むことになった。

日常の業務だけでも忙しいのに、入札説明会だ、下見だ、見積り書作成だと、営業方も事務方もフル回転した。

とはいえ、人手が足りなければ、営業も事務も役職者も、作業現場に行かねばならない、中小企業のテキサス・メンテにとって、大忙しの日々が続いた。

無事に必要書類も出し、今日の入札を半ばイベントめいた気分でもかえたテキサス・メンテの全社員は、いや児玉社長は本気でいたが、「落札しましターッ」に本当に驚いた。

そして面接初日。

一人目は、学生の2時間希望、二人目は4時間希望の午後にパートを掛け持ちしている53歳女性と、どんどん採用を決めて行った。

面接担当は、その時、手の空いている者で主に大淀課長が当たったが忙しければ、パート従業員古株が、当たる事すらあった。

何とかぎりぎり35人が採用となり、そろった翌週に研修、OJTと進んだのは速友物産での、作業開始日の1ヶ月前だった。

今日は資材を運び込む日。

「いやあ、トラックに紅白幕でも掛けたい気分だ。」と御満悦の児玉社長。

「ほっほっほっ、紅白幕は速友さんに、止められそうですが、本当に目出度いですな。」と副社長外堀がいつも以上の笑顔で受ける。

「社長も副社長も、もう時間がないんですから出発しますよ！」相かわらずの心配症、大淀課長。

そこへ「そろそろ出発しますよ。」と本日運転手をつとめる戸畑係長が来た。

「じゃあトラックに戸畑君と大淀君。後は、社長と副社長は、営業廻り用の車に、社内にまだいる10人をそれぞれ分けて乗せて出発して下さい。他の人達はもうむこうで待っているはずですから。」と事務方紅一点桜井しげののてきぱきした指示で、いざ出発。

市内中心部まで、都市高速を使って30分、高速を降りて、大した混雑にも合わず無事に速友物産との約束の時間には、ビル地下の指定された駐車スペースに車はズラリと揃った。

荷物の運び込みの総指揮は児玉社長自ら。前のりこみの10人、後から来た10人と役職たちも入れて、総勢24人で、まだ就業中のビルに、静かに、しかしすばやく、着着と資材を運び入れ、前もって教えられていた資材庫やシンク庫にセットしていった。

そして作業初日、何のはなばなしい事も無く、速友物産の担当者に簡単な挨拶をして、仕事は淡淡と進んでいった。

はじめは、やはり一流企業は違うと、役員階のしつらえに驚いたり、社員食堂のメニューをうらやましがったり、残念な事に、社員以外は利用できないことを嘆いたりしていたテキサス・メンテの作業員達も、日々の仕事の流れを組み立てていった。

3ヶ月たったある日。

「社長、速友物産からのクレームですーッ！」

戸畑係長がテキサス・メンテ社長席に駆け込んで来た。ちなみに、雑居ビルの一室なので、社長室などというもの無く、ただ、少しだけ立派な椅子が、他の社員の机と同じ机の前に置いてあるだけの社長の席である。今日も今日とて、足りなくなった作業員の代わりに、速友物産まで「行ってきます。」と出かけてから、1時間もたたずに、戻ってくるなりの一言が、先ほどのクレーム話だった。

「クレームだって！」と児玉社長と外堀副社長は声をそろえて叫んだ。

「いわんこっちゃない！だからウチみたいな小さい会社には、速友物産みたいな大きい所は無理だったんだあ」と悲観炸裂の大淀課長。「えーっと、クレームの内容によったら、損害賠償の金額は一っと、どこからひねり出したらいいんだ。ボーナスの支払いも近いのに！」と髪をかきむしらんばかりに、もだえている大淀課長を尻目に、一番冷静な、事務方紅一点桜井しげのは「クレームの内容は？」と、ごく当然の質問をした。

「は、はい！パソコンの画面をいじっているんじゃないかというお叱りで。速友さんの登戸さんも、いつになく怖い顔で、産業スパイでも雇ってるんじゃないかって…。」

速友の登戸氏は、役職は無いが、テキサス・メンテの担当者になっていて、万事に大らかな人物で、さすが大企業、殿様が平社員をやっている、などと云われている程の好人物。その登戸氏の怖い顔など見たくも無いが、産業スパイとは、ハテ？何の事だろう、と一同が不思議がったり、不安がったりしている。

事務方で紅一点であるとともに、当時、導入されて間も無かったパソコンのエキスパートでもある桜井しげのは、しばらく何事か、考えていたが、「社長、私に考えがあります。速友さんの作業員全員、今日の午後集めていただくわけには、まいりませんか？」

社長児玉は、一も二もなく承知した。実際、どうしていいかわからなかったのも、たよりは、パソコンに詳しい、桜井だけだった。

その午後、ずらりと並んだ速友物産担当作業員達に、桜井は静かに宣言した。「私の机を拭いて下さい。」

立ち会っていた社長も副社長も、疑問符で一杯な顔になったが、ここはもう桜井にまかせると決めたのだからと、だまって目顔で、作業員のたばねである大淀課長に、うながした。

大淀の指示のもと、奇妙な作業は、粛々と続けられていった。一人がきれいにした、同じ机を、別の一人がまた拭いていく、そしてもう一人がまた、と一見無意味に

見えた作業が10人目まで進んだ時、

「はい、そこでやめて下さい。クレームの原因が、わかりました。」

桜井は、おだやかに述べた。

「パソコンはキーボードやマウスで操作します。それらに触れば、パソコンの画面は、変わります。皆さんは、きれいにしようとするあまり、キーに触れて、押してしまったり、マウスを動かして、画面をいじってしまっていたんですね。これからは、パソコンには毛バタキで、ごくごくそっとほこりを払う程度にしましょう。」と作業員一同を見渡して言った。

クレームの原因と解決法が一度にわかり、速友物産の登戸担当にも説明して、納得してもらい、大淀課長の心配していた賠償金も、払わずに済み、ボーナスは、今期も無事に出る事となった。一同万歳！

社長児玉のポケットマネーで、ささやかではあるが、出席できる従業員一同で、テキサス・メンテの入る雑居ビル1階の居酒屋Qちゃん、慰労会が開かれた。

「テキサス・ビルメンテナンス株式会社と御一同様御家族様の弥栄を祈念しまして、乾杯！」の副社長外堀の音頭に和して皆で杯を乾し、始まった宴会は、なごやかに盛り上がっていった。

そこで、社長の十八番の「矢切りの渡し」のリクエストが、やらせっぽく、戸畑係長からあり、駆け落ち者に扮した社長と副社長が小さなカラオケのステージに乗り、無事に一曲歌い終わった社長が「これからだ、何もかも、以後よろしく頼む！」

女形よろしくタオルを被った副社長が、「ああいー。ついてゆきますうー。」

チョン。

テキサス・メンテ物語全一巻の終わり。

どなたさまもお足もと、お気を付けてお帰り下さいませ。トントントン、追い出し太鼓の音が軽快に響き、「えーっ、木戸銭はこちらに願います」の木戸番の声。この物語の中にビルメン会社の一つの理想をこめました。了